

新島襄の平民主義—ルーツとメッセージ

奨励	加賀 裕郎〔かが・ひろお〕
奨励者紹介	同志社女子大学長

主の慈しみは決して絶えない。

主の憐れみは決して尽きない。

それは朝ごとに新たになる。

「あなたの真実はそれほど深い。

主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い

わたしは主を待ち望む。

主に望みをおき尋ね求める魂に

主は幸いをお与えになる。

主の救いを黙して待てば、幸いを得る。

若いときに轡を負った人は、幸いを得る。

轡を負わされたなら

黙して、独り座っているがよい。

塵に口をつけよ、望みが見いだせるかもしれない。

打つ者に頬を向けよ

十分に懲らしめを味わえ。

主は、決して

あなたをいつまでも捨て置かれはしない。

主の慈しみは深く

懲らしめても、また憐れんでくださる。

人の子らを苦しめ悩ますことがあっても

それが御心なのではない。

（哀歌 3章22—33節）

同志社スピリットへの思い

同志社女子大学の学長をしております加賀と申します。同志社大学の文学部や文学研究科で、長年嘱託講師として教えてきましたが、近年はご無沙汰しておりまして、同志社大学の学生を前にお話をするのは、しばらくぶりです。

長い間、同志社に身を置きながら、同志社スピリットとは何かなどと考えることは少なかったのですが、2010年に学長になってから、時々の講演やスピーチ、また依頼された原稿やインタビューなどで同志社のこと、女性の高等教育のことなど、考える機会（考えざるを得ない機会）が増えてきました。また同志社の教育哲学である、キリスト教主義、自由主義、リベラル・アーツ、国際主義などについても、折に触れて自分の考えを書いたりお話ししたりする機会があります。そうした中で、今回は新島襄の「平民主義」についてお話ししてみたいと思います。ただし、新島が平民主義について語ったこと、新島の平民主義について語られることは、それほど多くないと思いますので、私の考えを交えて比較的自由に語ってみたいと思います。

新島と徳富蘇峰の平民主義

「平民主義」はあまり聞き慣れない言葉ですが、元々は新島の教え子である徳富蘇峰が唱えた立場だと思います。明治期以前は身分制の社会でした。人々は予め定められた身分に生まれ落ち、その中で生育し、活動し、死んでいきました。しかし明治期以降、身分制が廃止され、すべての人々は、平等な横並びの平民となりました。単純に言えば、こうした平民たちの力によって近代化を推進し、近代国家を造るべきだという考え方が平民主義だと申せましょう。同時に徳富は、富国強兵路線に反対する平和主義者でもありました。

徳富蘇峰自身は、世情の変化とともに国家主義の方向に変わりましたが、同志社の原点に徳富が説いた平民主義、平和主義があったことは心に留めておいてよいでしょう。と言うのも、新島自身が平民主義的な考えをもっていたことは明らかなからです。たとえば新島の教え子であり、後に早稲田大学の教授を務め、早稲田の野球部を創設した安部磯雄は、新島の生前を回想して、「先生の生涯は全く平民主義で一貫して居るといふても過言ではあるまい。若し先生に最も嫌いのものがあつたとすれば、それは貴族主義と官僚主義であつた」（同志社校友会編「其時代の先生と学生々活」『新島先生記念集』1940年 174頁）と述べているからです。平民主義の反対語は貴族主義、寡頭主義などでしょう。官僚主義に対するのは在野主義かもしれません。新島は在野の人だったし、私立大学を創設することにこだわったからです。

徳富蘇峰の平民主義は、新島襄の影響を受けたか、少なくとも両者の考えは近いところにあったと言えるでしょう。徳富蘇峰が平民主義を論じ、その名を高からしめたのは、『将来之日本』という本ですが、同書の第三版（明治20年）に新島が序文を寄せています。その中で新島は平民主義について、「即ち公道正義を以て邦家の大本となし、武備の機関を一転して生産の機関となし、圧抑の境遇を一変して自治の境遇となし、貴族的社会を一掃して平民的社会となすにあり。而して君の論旨中、含蓄する所の愛国の意は、全国を愛するにあり。全国を愛するは全国民をして各その生を楽しみ、その宜しきを得せしむるにあり」（同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年 285～286頁）とパラフレーズしています。

愛国は即ち愛人

明治20年と言うと、西洋文明の急激な流入に伴って、社会の秩序や人々のモラルが乱れているという論議が起こり、明治23年の教育勅語渙発に至る時期です。時代背景を念頭におけば、徳富蘇峰の主張も、新島の序文もラディカルです。正義の実現を国造りの基本とし、軍備拡張よりも生産力の向上を求め、集権主義、権威主義よりも自治自主主義、貴族社会より平民社会が大切だと言うのですから。また愛国とは権威への隷従ではなく、一人ひとりを愛すること、そして一人ひとりが善い人生を送ることができるようにすることだと言います。新島は「愛国ノ主意」と題する文章でも、「愛国ト申セトモ、ツマリ愛人」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1 同朋舎出版 1983年 436頁）だと言います。

平民主義について新島が述べているものを、もう一つ見てみましょう。新島は「平民主義」と題する、説教用のメモを書いています。そこで平民主義は衆治（民衆の統治）、民治（平民の統治）と同一視され、殖産主義・平和主義を伴うものとされています。平民主義は寡人主義と対置されています。寡人主義は少数の人が専制的に支配します。寡人主義では、国家の命運が少数のエリートに握られます。それに対して平民主義では「全国民戮れざれば一国戮れざるべし」（『新島襄 教育宗教論集』287頁）ということになります。

新島は明らかにアメリカ合衆国を平民主義の模範と見なしており、アメリカと比べて日本は大きな後れを取っていると考えています。新島はこう述べます。「日本従来の平民、無学無智、故に賤し。然るに米〔国〕の平民は、学識あり、有為の気象に富む。世が開明に進むに随ひ、貴族主義は漸々と跡を絶つ」（同書 288頁）。アメリカの平民は「学識あり、有為の気象に富む」のですが、日本の平民は無学無智である。だから日本の平民は教育を通して、「学識あり、有為の気象に富む」人物とならなければならない。新島は留学中、アメリカ社会の平民主義が優れているのは、優れた教育制度が根を張っているからだ、と気づいたのではないのでしょうか。そこで新島は、教育事業に命を賭けようと思ったのではないのでしょうか。

ここまでくると新島にとっての平民主義が、デモクラシー（特にアメリカン・デモクラシー）と重なることに気付くでしょう。新島は1864年に日本を脱出し、その翌年にアメリカに到着しました。新島の平民主義理解、平民主義を支える教育観も、おそらくアメリカ滞在中に獲得したものだと思います。そこで、新島がアメリカ滞在当时の同国の教育やデモクラシーについて、簡潔に述べてみましょう。

アメリカ合衆国の教育制度

先ず教育についてです。いずれの近代国家も公教育制度の整備に取り組みます。その理由はいくつもありますが、少なくとも理由の一つとして、近代国家が教育ある、有為な国民に支えられなければ維持できないことが挙げられます。日本でも明治維新後に公教育制度を整備しようと躍起になりました。アメリカ合衆国の場合、公教育制度の先鞭をつけたのは、マサチューセッツ州の教育長を務めたホレース・マンのCOMMON・SCHOOLでした。COMMON・SCHOOLは、まさにCOMMON・マンのための学校です。新島がアメリカに渡る、ずっと前のことでした。中等教育に関しては男性のアカデミー、女性のフイーメール・セミナリーがありました。19世紀を通じて中等教育機関としてはハイスクールが優勢になっていきます。

高等教育機関は17世紀を出発点としますが、19世紀後半には女子カレッジが創立されます。アメリカの大学の特徴は、その出自が、曖昧で、適当でさえあるように見えることです。たとえばハーバード大学の名は、草創期の大口の寄附者（牧師）の名前から採られていますし、スタンフォード大学の由来は、大金持ちのスタンフォード氏の子息、リーランド・スタンフォード・ジュニアの死を悼んで創立されたことにあります。スタンフォード大学の正式名称はリーランド・スタンフォード・ジュニア大学なのです。

日本の私学が大上段に構えて「建学の精神」を語るのに対して、アメリカの大学は自由気ままに思えます。しかし、これには意味があるのです。日本の場合には、官学の力が強い。官学が正統性をもつようなところがあります。だから私学はその存在理由を示す必要があり、建学の精神をことさら強調することになります。それに対してアメリカの場合、大学は自生的に発生してきたのです。だから理念や精神を高く掲げる必要もなく、寄附者や創立者の名前を冠するのに躊躇しなかったのです。アメリカの公立大学は、私立大学よりずっと後れて創られました。新島の在米中、教育制度は全国に普及しており、新島はそれらを見聞して歩いたことでしょう。そして、アメリカの学校の自生的、自発的、私学的性格に感銘を受けたのではないのでしょうか。

アメリカン・デモクラシー

次に、新島の平民主義理解の背景にあったと思われる、アメリカン・デモクラシーについて見てみましょう。A・マッキンタイアという倫理学者は、アメリカ合衆国の典型的な人物像を表すために“character”という語を使い、アメリカのキャラクターが「独立自営農民」から「企業家」に変わっていったと言います(Alasdair MacIntyre, After Virtue, University of Notre Dame Press, 1980)。17世紀のアメリカへの入植以降、アメリカは農業社会でした。移民である独立自営農民がコミュニティを切り開き、町民全員が平等な資格で、コミュニティの運営に携わりました。新島の平民主義を支える平民とは、コミュニティを自発的に支える独立自営農民に近いものがあるかもしれません。

しかし、新島の平民主義観は、これに尽きません。何故なら新島の平民主義には「殖産主義」が含まれるからです。また新島の論考に「人種改良論」（『新島襄 教育宗教論集』270～282頁）というものがあります。これは社会進化論的な内容ですが、アメリカでこの種の思想が流行したのは19世紀後半でした。つまり新島の平民主義は、独立自営農民に典型的な自治・自立の人という面に加えて、19世紀後半、アメリカが産業社会に向かっている時代の殖産主義、社会進化論という側面を併せもっているのです。これは新島のアメリカ滞在時が、ちょうど農業社会から工業社会への過渡期だったからかもしれません。もう少し述べてみましょう。

新島のアメリカ生活は1865年に始まります。1865年と聞いてピンとくるとありますが、南北戦争が終わった年です。南北戦争の原因はいくつも挙げられます。奴隷制をめぐる対立は周知のとおりですが、それだけではなく、自由労働による工業社会に向かう北軍と、奴隷労働に支えられた農業社会の南軍との内戦でもありました。北軍の勝利は、アメリカが正面切って工業社会へと向かうことを意味しました。新島は、南北戦争以後のアメリカが、工業社会へと向かいつつある時代の10年間を、かの地で過ごしたのです。このことが新島の平民主義に見られる殖産主義と社会進化論に影響していると思います。

次に、新島の平民主義を支えていたアメリカン・デモクラシーの一面面に光を当ててみましょう。その一面面とは、アメリカの学校制度で見た自生的、自発的、私学的特徴と呼応しています。ヨーロッパのデモクラシーは、しばしば革命を伴う前時代の転覆によって成立しただけに、そのための理念が必要不可欠でした。ロックの『市民政府論』やルソーの『社会契約論』が、その代表です。

生活様式としてのデモクラシー

しかしトクヴィルの名著『アメリカのデモクラシー』でも指摘されるように、アメリカは非民主的な前時代をもたず、出発点から人民主権とデモクラシーの土地柄でした。つまりアメリカのデモクラシーは、アメリカの教育制度と同様に自生的、自発的、私学的なのです。政治学者の宇野重規氏は、アメリカの「民主主義とは制度や理念である前に、一つの『経験』なのではなからうか」と述べています（『民主主義のつくり方』筑摩書房 2013年 24頁）が、これはアメリカのデモクラシーの自生的、自発的、私学的な性格を、私たちは別の仕方でも述べたものです。要するにアメリカのデモクラシーは、大きな理念（大学で言えば建学の精神）によって存在し、また正当化されるものではなく、自生的、自発的な経験であり習慣であって、単に政治の場だけでなく、日常生活において、人々が平等な平民としてコミュニティを協同して創っていく実験的な生活様式であり、そうした生活様式が豊かな経験を生むことにおいて、部分的に正当化されていくというものなのです。

アメリカを代表するデモクラシーの哲学者であるジョン・デューイは次のように述べています。「デモクラシーという観念そのもの、デモクラシーの意味は不断に新しく探索されなければならない。それは不断に発見され、再形成され、再組織化されなければならない・・・生活様式としてのデモクラシーが止まることはあり得ない。それが生き続けるべきだとすれば、現に存在し、また到来しつつある変化に対応するように前進しなければならない。もしそれが前進しないならば、もし止まろうとするならば、デモクラシーは既に死滅に至る退路を出発している」（奨励者訳）（“The Challenge of Democracy to Education”, Progressive Education, 1937. Reprinted in The Later Works of John Dewey, Southern Illinois University Press, vol.11, 1987, p.182）。

デモクラートとしての新島襄

新島がアメリカで体得した平民主義とは、このようなものではなかったかと思います。それは習慣としての、生活様式としての平民主義です。だからそれは生活の隅々で実践され、習慣として定着し、次に繋がっていくようなものです。同志社関係者の多くが知っている新島のエピソード、たとえば同志社英学校の使用員であった松本五平が、学生の多くに馬鹿にされていたのに、新島だけが「五平さん」と呼んで平等に対応したとか、妻の八重が夫を「襄」と呼び捨てにするのに、夫は妻を「八重さん」とか「あなた」と呼んだというエピソードは、新島の平民主義の日常生活での現れだと言えます。もう少し大きな話では、日本最大の宗派であった長老派と会衆派の合同を目指す教会合同の運動があり、新島の教え子の大半も賛成していたのに、新島が強硬に反対し続けたことが挙げられるでしょう。長老派は専頭主義的であり、先に引用した安部磯雄の論にもあったように、新島が最も嫌うのが専頭主義だったのです。

新島の平民主義については、まだまだ語りたことがあるのですが、今日はこのくらいにしておきます。少しでも新島の平民主義のルーツ、また彼のメッセージをご理解くだされば幸いです。